
大樹と夢物語

you

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大樹と夢物語

【Nコード】

N5923T

【作者名】

you

【あらすじ】

平穏な学園生活を送っていた高校正、中野翔也のクラスに転校生がやってくる。とてつもない美少女の転校生と出会ったその日から翔也は不思議な夢を見るようになる。夢の世界と現実の世界、二つの世界で生きていく翔也を待ち受けている運命は……？

1 一出会い

「おはよ」

「おはよっ」

クラスメイト達が挨拶を交わしているのを俺は自分の席、窓際の一番後ろの席に座って呆としながら聞いていた。

ああ、今日も退屈だが平和な学園生活の1日が始まる。
そんなことを考えていた俺に、

「よっ、おはよーさん」

ポン、と肩を叩いて挨拶をかけてきたのは、友人である棚町明だ。
たなまちあきら

「ああ、おはよう」

こいつは顔はそれなりに整っているが、明るくお調子者といった性格で3枚目といったキャラクターだ。はっきり言えば言えばただの変人なのだが。しかしそのキャラクター姓で誰であろうと物怖じせずに話すため、友人が多い。

しかしこいつは、人付き合いが悪いわけでないが、誰からも好かれるとか、クラスメイトは一目置くとか、そんなことは全くない平凡で、ややもすると影が薄い俺を、何かと構い行動を共にしてくれる。俺の唯一の親友、と言える奴だ。

もっともその代償としてたまに馬鹿騒ぎに巻き込まれるのだが、面倒ではあるが退屈はしないため、それも含め、なんだかんだでこいつのことを俺は気に入っているのだろう。

「親友、聞いてくれよ。大ニュースだぜい」

またか……。

どうせガセだろう。こいつが前に大ニュースを持ってきたときは、東先輩一（二年生の美人で生徒会副会長で剣道部部長の完璧超人）には許婚がいて、しかもこの学園の生徒らしいとか言って、東先輩のファンの生徒達一（男女両方）が騒動を起こした。

その騒動に俺は巻き込まれ、なぜだか知らないが、東先輩と決闘という名の剣道の試合をすることになった。

3本勝負で1本は取ったが、結局2－1で俺は負けた。1本取ったということで『許婚はいたが時代錯誤なのでもう解消された』と東先輩が言ってこの騒動は幕を下ろした。…俺は何のために闘ったんだろうか？

しかしそれからというものの東先輩は何かと俺に構うようになり、一部のファンから眼の敵にされている……はあ。

まあそれは置いて、とにかくこいつの大ニュースは大半がガセか肝心の部分が外れているのだ。

だから、話半分、朝の話題程度に聞いておくか。

「…なんだよ？大ニュースって」

「このクラスに転校生が来るんだって、しかもすごい美少女らしいくうう！美少女転校生、これはクルゼい！」

何がクルのかわからんが、おそらく転校生が来ると言うのは本当だろう。もつとも美少女ではなく美少年だったりするとかのはずだ。こいつの大ニュースの信憑性からいってそう判断できるだろう。

もつとも俺には美少女だろうが、美少年だろうが縁がないだろうから関係ないだろう。隣の席は空いていないし、転校生と積極的に話すようなことはこいつはしても俺はしないからな。

「ま、俺には関係ないし。おまえのニュースが当たるかどうか見てやるよ」

「おっ、言ったな。もし俺のニュースが当たっていたら今日の昼食はお前のおごりだぜ？」

「なら、外れたら俺は帰りにスイーツでもおごってもらおうか？」

どうせ500円ぐらいだし、こいつのニュースがドンピシャで当たるわけがないし、妹へお土産ができるな。まあ金に余裕がないわけではないが、こういうのはおごりだとなぜかおいしくなると言うものだ。

「ふっふっふ、いいだろう、今日こそ俺のニュースの偉大さを知るのがいいみやあー!!」

「はいはい」

『キーンコーンカンコーン！キーンコーンカンコーン！』

昔ながらのチャイムが鳴り、クラスメイト達はそれぞれの席に戻っていく。

そして全員が席に戻って数十秒後、教室に美人が入ってくる。

「はい、みんな席に座ってるねー。じゃあ出席取るよー」

転校生などではなく、わがクラスの担任、三波容子^{みなみようこ}24歳独身だ。なぜこんな若い教師が担任なぞ持つことになったか？それは前任の担任、50過ぎの教師が家庭の都合（不倫だとか言う噂もあった

が真相は定かではない。ちなみに噂の発信源は明だ）で教師を辞めてしまい、なぜか副担任だったヨーコ先生（愛称でクラスメイトだけではなく彼女の受け持ちの生徒は皆そう呼ぶ）が担任になった。

ヨーコ先生は大人っぽい色気たっぷりのナイスバディの美人だが、気さくで話しやすく（実は内面が結構子供っぽいというか、抜けている）生徒達から人気がある。そのためこのクラスは先生に迷惑をかけるようなことはなく、担任交代から約半年間うまくいっている。もっともこのクラスは明を筆頭にいい意味で馬鹿が多いから、というのが問題が起きない理由だと俺は思っている。

「中野翔也君！」

っと、俺が点呼されてるな。

「はい」

ふう。大きすぎず、小さすぎない声で話すのは毎回疲れる。明なんて『はいはいはい！』と答え、『返事は一回でいいの！』とヨーコ先生から窘められている。しかし何度注意しても毎朝あいつはやめない。曰く、『同じネタを毎回繰り返す、お笑い用語で天井って言うんだ。俺も持ちネタを作っておかないとな！』まったくあいつはお笑い芸人にでもなるつもりか？……いや、想像しても全然違和感がないな、むしろ天職なんじゃないか？

「はい、全員そろってるね。今日は皆にニュースがあります。なんとこのクラスに転校生がやってきました。喜多川さん、入ってきてー！」

ヨーコ先生の声とともにガラガラと扉が開かれ、女生徒が入ってきた。

『おぉー!』

教室にどよめきが沸く。

「なん…だと」

俺はオサレバトル定番のセリフを口走ってしまう。

なぜって？ 転校生は、長い黒髪がとても艶やかで、クールでミステリアスな表情はともつもなく美しさを感じさせる少女。つまり、美少女だったからだ。それは明の大ニュースが情報どおりだったことを意味する。

今日は午後から槍でも降ってくるのかなあ？

俺は窓際の席で窓から見える、晴れ渡る雲一つない青空を見ながら現実逃避しようとした。

きたかわひじり

「喜多川聖です。親の都合でこの近くに引っ越してきました。今日からよろしくお願いします」

しかし、彼女の声を聞いたとき、現実に戻ってきた。いや戻ってこさせられた。

彼女の声は少しハスキーな感じがするものの、とてつもなく美しい声だったからだ。あまり大きな声で、いやどちらかといえば小さい声で話していたのに、一言一句が聞こえ、頭が理解してしまう。そんな声、もはや魔性の声だ。

「じゃあ、喜多川さん、開いている席…ってああしまった！机と椅子を持ってきてもらうの忘れてた!!」

くくく、ヨーコ先生はあい変わらず抜けているな。

皆、くすくすと笑っている。

「ヨーコせんせい！俺が持ってきます！」

「うーん、それじゃあ棚町君、お願いできる？」

そう言いながらもなぜか俺のほうを見て、

「うん、一人だと往復しないと持ってこれないから、中野君もお願いできるかな？」

俺は明とセットで認識されているんだろうか？……ふう、しかたないか。

「わかりました」

「後、寄り道なんてしないように」

「……わかりました」

明、信用されてないな。まあ、それは普段の奴を見てれば当然か。

「さっさと行くぞ明」

「ういいうい了解」

そんなこんなで俺の日常にちよつとした事件が起きた。

思えば、これがすべての始まりだったんだろう。
夢の物語が、始まる。

1 一出会い（後書き）

某所のSSもにじファンのSSも筆が進まなくなってしまい、気分転換に書いていたら、いつの間にか量が多くなっていったので、この物語を晒します。

コンセプトはラノベを書いてみるということで、以下にも今風のラノベ的な文章に………なっている、のか？

2 日常

「ああ、うまい。学食のうどん全トッピング、580円はうまいなあ」

ズルズルとうどんをすすり、これ見よがしに俺に聞こえるように
そう言う明。

もつとも俺は全く気にしていないが。

「良かったな、こんな幸運はもう一生起きないからな、味わって食えよ」

「…………ちくせう、このブルジョワが」

「ふっ、負け犬の遠吠えだな」

俺の両親は仕事人間だ。そのうえ優秀で、どちらも年収が一千万を超える。結婚も愛してるとかからではなく、ビジネスで互いに協力できる立場だったから、家庭が同じのほうが都合が良いから、という理由結婚した。（もつともなんだかねで相性がいいいんだろう。っていうか両親が揃ってツンデレってどういう家庭だよ…）

子供は作らない予定だったが、親の要望で、俺と妹（年子だ）が産まれ、また仕事漬けの日々に戻った。たまに長期の休暇を取って戻って来たときはそれこそ海外旅行とかに行くが、普段は家にすら帰ってこない。小学生のときは普段は家政婦が毎日通っていたくらいだ。

そんな環境で、グレるとか非行に走らず、それなりに真面目な俺達兄妹に、安心したのか、いつからか一般学生には比べ物にならないほどの小遣いが振り込まれてきた。具体的には十万ぐらい。これ

は生活費を入れてではなく、すべて俺の自由にしたい小遣いだ。俺の毎月買っているものを上げたら、各種本（某少年誌、漫画の単行本、小説）、CDくらいだ。1万もあればおつりが来る額だ。後は明に連れられて外食したり、交遊費ぐらい。小遣いの大半が余る。PCだって一度買えば3年は持つし、服だってそれほど気にしないから新しいのは季節毎にも数着しか買っていない。そのため、余ったお金は貯金しているのだが、もう百万以上は貯まっている。そんなわけでこのような額の臨時の出費など痛くもかゆくもない。

「それに俺には、このブルジョワ弁当があるからな」

「ぐぬぬ」

ブルジョワ弁当。明が命名した俺の弁当である。

俺は家政婦のおばちゃん、駒田さんが作った料理は嫌いではなかったが、和食のみしかなかったので、洋食が食べたいと常々思っており、いつからか週に数回は俺が洋食で食事を作るようになった。その後作り続けているうちに、弁当を作るほど腕が上がった。そして高校生になってから弁当を毎日自作している。

ちなみに駒田さんは和食はどうまくはないが洋食も作れる。しかし俺達の自立を促すため洋食が食べなければ自分達で作ればいいと言い、実際に俺が練習しているときは、手伝ってくれていた。

さて、ブルジョワ弁当についてだが、この弁当の材料はなんと市販のものをほとんど使用していない。

野菜は有機野菜とかで市販のものより高いし、このアスパラに巻いたベーコンも産地直送の物だし、よく作るタコさんウィンナーも産地直送で、市販のものとは味や肉汁の量が全く違っている。中には味付けがしてあり、おつまみに合うといったものもある。

ゆえにブルジョワ弁当、ということらしい。当たっているから否定できない。

「このアスパラのベーコン巻き食うか？」

「犬とお呼びください」

俺は毎日食っているものだし、毎度こうして何かおかずを上げている。のだが、なぜか学食だと視線が俺達に向いているような気がするんだよね。うーん、俺って自意識過剰なのか？

「しかし、喜多川ちゃん美人だよなあ」

「まあ、それは認める」

確かに、あれは好みのタイプがどうかという問題ではない。誰が見ても美少女と答えるだろう。

「お、もしかして」

「いや、一目惚れとかじゃない。ただの感想。お前だってあれはそう思うだろう？」

「まあねえ。あれは反則的だよなあ。俺でさえ話しかけるのとはばかられるし」

件の転校生、喜多川聖。

転校生で美少女というイベントだけあって、明を筆頭にクラスメイトは質問攻めとか騒ごうとしたが、喜多川の持つ雰囲気当てられ、話すことすらできなかった。

クラスメイトも、ほかのクラスから見に来た奴らも、遠巻きに見ているだけだった。

喜多川は他者を排斥するとかはしないタイプだろう。質問すれば答えてくれたはずだ。実際、教科書なんかを見せるために隣の席の女子が話しかけたときも、ちよつと笑って『ありがとう』と答えたのだ。

その後、隣の席の女子が何度か会話していたが、喜多川は特に嫌がるわけでもなく、普通に会話していた。しかし、それでもほかの奴らは自分達からは話しかけられなかった。喜多川はそんな高嶺の花というか、定められた者しか触れてはいけないような雰囲気がある。喜多川と話した女子は曰く、『喜多川さんは女神、異論は認めない』らしい。

「ま、俺にはもう関係ない話だよ。いつもの退屈で平和な日常にちよつとしたイベントが起きた。それだけだよ」

退屈で平和、はこいつの起こす騒動以外はだがな。

「ふーん、ま、いいんでない？ やっぱり平和が一番さあ」

トラブルメーカー
いや、お前が言うなよ。

「ういい、やっとガッコが終わった」

ヨーコ先生の帰りのホームルームも終わり、自由な時間がやってきた。

クラスメイト達は部活に向かう者、帰りはどこかに寄る？と話している者などまちまちだ。

俺は一応部活をやっている。剣道部に所属している、もっとも週の練習で二、三日ほどこしか参加しない不良部員だ。しかし俺は剣道部のなかでも一応実力者となっている。それは東先輩から一本を取ったからだ。一応というのは大半の人間が運が良かっただけだと思っているからだ。

もっとも勝った理由は運が良かっただけだからではない。俺は部活では不良部員だが、小学生、中学生の時、日曜は毎週駒田さんの夫のおじいさんが開いている子供の剣道道場へ通っていたし、週に何日かは道場や家の広い庭で練習していた。中には大人と練習することもあり、格上との戦い方も知っていた。今でも日曜は道場へ通っているし。

そんなわけで、俺自身それなりの実力がある。さすがに全国でトップレベルとかとは思っていないが、市内では同学年では敵は少ないと思っているぐらいには実力がある。はずだ。

なら真面目に部活に出れよという意見があるかもしれないが、中学生の時にちょっとした事件があり、俺は学校に行くことが苦痛になった。学校には通っていたものの、部活には全く出なくなったし、修学旅行とかの行事も参加しなかったほどだ。中学生の時の知り合いがいない同じ県内だが少し離れた市のこの学校に通っている今でも部活には積極的に出たくない。

練習が嫌なわけではないが、集団行動することが苦手なので、家の庭か道場で竹刀を振るっている。

そんなわけで明の予定に合わせて、どこにも寄らなければ部活に、どこかに寄るならば、早く帰れるなら道場で、遅くなるなら庭で練習することになっている。

「で、今日はどうする？」

「実は昨日、隣の市の駅裏で良さげな店を見つけたんだ。今日行ってみない？」

「何の店？」

「スイーツだぜい」

そうか、もし大ニュースが外れていたら、その店でおごりだったのか。おごりではなくなったが、気になるな。今日はこいつに付き合うか。っていつもどおりか。

「よし、今日も付き合わせてもらおうぞ」

「りょかい。んじゃっさと行くべ」

「ああ」

俺達は移動を開始した。

明はこんな変人だが、いい店を見つけるのは天才的にうまい。

例として、少し寂れた大衆食堂に入ったが、駒田さんの作る味噌汁を超える味噌汁が出てきたことがある。味噌は店主の実家の自家製らしく市販のものとは全く味が違った。

ほかには、あまり売れていないパン屋に入った時は、ほかのパンは普通の味だが、ジャムパンが異常にうまいパン屋だったことがあった。パン屋の店主の実家が、農家でイチゴ狩りなんか行えるところで、その取れたてのイチゴを使用して作ったジャムパンだった。明は変人だが、変な嗅覚で、なぜか美味しいものを探し当てるのだ。俺がこいつの予定に合わせるのは、親友というのもあるが、確実に美味しいものが食べれるからだというのも理由だ。妹にお土産を買っていくとあいつの機嫌が良くなるしな。

「じゃあな」

「うい、また明日」

明と駅で別れ、俺は乗り継ぎの電車に乗った。
今日のスイーツ、ハーブを使ったパウンドケーキ、すごく美味かった。

場末の喫茶店といった感じで、中は煙草の匂いが充満していたひどいところだった。しかし、店主とその奥さんは実家が資産をかなり有していて道楽で店を開いているらしく、利益度外視で美味しいコーヒーとデザートが出る店だった。

奥さんは元々パティシエを目指していたらしく、フランスとかで留学していたこともあるらしい。そんな腕前の人が、利益度外視で作ったスイーツ類、当然美味いに決まっている。

あいつの美味しいものを発見する嗅覚は相変わらずだった。

つと、もうすぐで到着か。

電車が駅に到着し、俺は電車を降りると、自転車がとめてある駐輪場へ移動し、自転車のかごに、無理言ってテイクアウトした（俺達みたいな客が珍しいのか、笑顔で対応してくれた）パウンドケーキとクッキーが入っている箱を学校指定の鞆が箱を潰してしまわないように入れ、自転車に乗り家へと移動した。

そして数分で、我が家についた。

塀は少し高く、セキュリティがついている。門にも電子キーがついている。

広い、俺が剣道の練習をしても全く問題のない庭。

玄関はいたって普通で、鍵も普通の鍵だ。

「ただいま」

俺は門と玄関の鍵を開けて、家に入った。

「お帰りーお兄。今日は？」

「ある」

俺はそう言って、箱を渡した。

「ありがとう」

妹は箱を受け取ると、早速開けた。

「今日はパウンドケーキとクッキーか」

「クッキーは二つ袋があるだろ？一つは俺のだから」

「わかった」

この妹とのやり取りは、俺が遅れて帰ってきたときは明と寄り道しているということで、ならば妹にお土産を買ってきている可能性が高いということであり、『今日はお土産はある？』と妹が聞いてきたということだ。

俺が明と寄り道するようになってから、ほぼ習慣化したやり取りだ。

このお土産のためか、妹との仲はそれなりに良好だ。悪くもなく、特にべったりしているわけでもない。食事中に話すことがあれば話すし、黙ってるときは黙っている。一緒にテレビ番組や借りてきたDVDを見ることがあれば、一日中ほとんど顔を合わせないときもある。

まあ、喧嘩とかしないだけましなんだろう。それよりも着替えて夕食にしよう。

俺は着替えるために、2階に上がり、自室に入った。

ベッド、デスクトップと違いかさばらないから買ったノートPCの置いてある机、フカフカで結構な値段がした椅子、衣類がしまつてあるクローゼット。

うん、相変わらずの俺の部屋だ。

さて着替え、着替えっと。

3 大樹

「いただきます」

俺はそう言ってから夕食を食べ始めた。

相変わらずの和食、しかし俺達兄妹にとってはお袋の味にすらなっているだろう味付けだ。うまいし、それに俺が帰りが遅れるときは何か食べてから帰ったということなので、量も少なめにしてある。さすが駒田さんだ。

「お兄、ごちそうさま。相変わらずおいしかったよ。にしても、あの人はどうやってこんなおいしいものを探り当ててるんだろうね？ 普段は本当変人なのになさ」

「俺に聞くな。というかあいつのことをすべて理解できる人間などこの世界には存在しない、同じ変人以外は」

「そうだよねえ、あの人……恋人いるんだよね、でもその人もまた変人だしね」

そう、あいつは3枚目で変人なのに、年上の女子高に通っている3年生と付き合っている。

俺はこのことを明本人から聞かされたとき、こいつは何を言っているんだ？ 完全に狂ったか？ と思ったのだが、実際に紹介されてしまった。もちろん俺は、ドッキリとか疑っていたのだが、本当に付き合っていたのだ。証拠としてキスとか目の前でされたし、認めざるを得なかった、あの変人と付き合っている女性、しかも美人がいると。

もっとも、あとでその女性もあいつに負けず劣らず変人だという

のがわかったのだが……（会うたびに逆セクハラと言って、いきなりアレをつかんできたりとか）ああいうのも類は友を呼ぶととても言うのか？

妹が恋人を知っているのは、前に二人を連れて家でクリスマスパーティーを開いたからだ。ちなみにそのときのケーキは奴の見つけた店で買ったものだった。

「とにかく、あいつのことは考えるだけ無駄だ。この話題はやめよう」

「ん、わかった……あ、そうだ、お兄、来週の土曜日空いてる？」

「ああ、特に用事はないし、庭か道場で竹刀振る予定だ」

「実はのりちゃんからコンサートのチケット貰ってさ、一緒に行かない？」

のりちゃん、錦法子は妹の同級生だ。にしきのりこ妹が中学生になってから真っ先に友達になり、3年連続で同じクラスであるため、ずっと仲が良く、妹の親友といえる娘だ。

こののりちゃん、なんと半年ほど前にアイドルとしてデビューし、一気にトップアイドルとしての地位を築いた娘だ。初の大型コンサートをこの県が一番でかい会場で行う、といった話を前に妹に聞かされたことがある。どうやらそのコンサートのチケットを親友である妹に渡していたらしい。

「ああ、いいよ」

「はあく良かったあ。あたしがのりちゃんとメールとか電話をしてるのは知ってるでしょ？ 実はお兄のことがたまに話題に出てくるん

だけど、それで一度もお兄に会ってないから今度会わせてよ、って話になって、あたしも別にいいやと思ってOKしちゃったんだけど、のりちゃん今は自由な時間がないから、コンサートが終わったら撤収の際に時間が空くからそのとき会おうって話になっちゃってさあ」

相変わらず仲がいい二人だ。

「のりちゃんも最近はストレスが溜まってるみたいで、お兄に会ってみたいって言われたら、やっぱり少しでもかなえさせてあげたいからさ」

「っていうか、そんなこと聞かされたら、断れないだろうが」

「ははは、もし、予定があったなら今の話で泣き落としするつもりだったから」

女って奴はこれだから…。

「ま、予定がないなら、いいや。来週の土曜日の午後、まあ夕方からだから、昼過ぎぐらいには出かけよっか」

「わかった」

おっと、話しながら夕食を食べていたら、いつの間にか食べ終えていた。

「ごちそうさま、食器洗ったら風呂先に入るぞ」

さて食器を洗うか。

「わかったー、あたしはテレビ見てるからー」

さて、風呂は入って課題をやったら寝るか、今日は体動かさなかったから、明日の朝はランニングでもしよう。だから少し早く寝るかな？

風呂に入り課題も手早く片付ける。うちの高校の学力は偏差値が平均ぐらいだから、参考書を見れば課題なんてすぐに解ける。今日はすることがないし、明日はランニングするつもりだし、もう寝るか。

今日はちよつとハプニングがあつたが、平穏な一日だったな。明日も平和でありますように。

俺はちよつと値段が高いベッドと布団で眠りについた。

「……zzz……zzz……」

.....。
.....？

眩しい…
もう朝か？
眼を開く。

「……は？」

俺の眼に映った景色は、緑が生い茂る木々、まるで森の中にいる景色だった。

.....。
.....。
.....。
.....。
.....。

あ、あまりのことに呆然としていた。

朝起きると俺は森の中にいた。なにを言ってるのか（ry
落ち着け、落ち着け、俺。

そうだ、これは明が仕掛けたドッキリ、っていくらあいつでもこんなことはしない。あいつは変人だが人を故意に傷つけるようなことはしない。知らずに傷つけることはあるのだが…。

って違う！今はこの状況を、とりあえず起きてみよう。

俺は、何にか硬い物体にもたれかかるように眠っていたらしい。起き上がり、地面に足をつけて歩き、後ろを振り返る。

「これは学校の大樹？」

つい口に出してしまった。

振り返った先には、俺の通っている学校にある樹齢不明の大樹と全く同じ樹があったからだ。

どうやら先ほど俺が眠っていた場所は、大樹の中の空洞だったらしい。この樹はとにかくでかい、そのため人が入れるような空洞があるのだ。

しかし、いったいここはどこなのだろうか？

よし、とりあえず周りを歩いてみるか。

「あ」

歩こうとした俺は声を上げて足を止めた。

俺の今の服装はパジャマ。つまり靴なんて履いているわけもない。当然こんな自然環境の道がないところを歩いていけない。

…どうしよう？

「？」

いきなりテンションが下がった俺の眼にあるものが映った。

大樹の空洞の下のように何かがある。

手にとって見ると、ブーツのようなものだった。しかもなんか鉄製？でできている。まるでゲームの装備みたいな靴だ。

ないよりはましだと思い、その靴を履いてみた。なぜか、俺の足のサイズと脚の長さにぴったりだ。

よし、これで歩ける。

まずは大樹の周囲を歩いてみる。

周囲は完全に木々が生い茂っていたが、空洞があった裏側に木々が立っていない道のようなものを発見した。獣道なんだろうか？

ここにいっても仕方ないから、歩いてみるか。

しかし、もしもの時に備え何か持っていないと不安だ。

そう思った俺の目に、大樹の枝が眼に映った。

ちょうど市販の木刀のような長さで太さの枝だ。あれを折って持っていく。

『ボキン！』

と音がして、枝は折れた。

二、三度振ってみるが、軽すぎず、重すぎず、手ごろな重さだ。

強度も試してみようと、別の樹に少し強く打ちつけてみるが、全く日々など入らず折れたりする様子もない。

「せいっ！」

思いつき打ち付けてみたが、棒は全く大丈夫だった。

それどころか、木の打ち付けられた部分がへこんでいる。

なんて強度だ……ってあれ？ さっきは手で折れたのに、おかしいな。

俺はもう一度棒を折ってみようとしたが、全く折れる気配はなかった。

おかしい……でも考えていてもしかたない。武器が手に入ってラッキーと思っておこう。こんな状況だし、そうしておく。

さて、あの道を歩いていってみるか。

黙々と道を歩いていく。
獣が出るわけでもなし、ただ代わり映えしない景色の中をただひたすら歩いていく。

「……………!!」

今、何か聞こえた？

「……………!!」

やっぱり何か聞こえる!!

「きゃあああ!!」

人の悲鳴!?

俺は反射的に走り出してしまった。
少し走ったら、道が開けた。

道が開けた先では、ゲームや漫画に出てくるゴブリン?のような生き物が人を襲っていた。

「っ!」

俺は咄嗟に倒れている人に向かって刃の厚い剣を振り下ろそうとしたゴブリンに向かって走り出した。
その数瞬後、

『ガキーン!』

と音がした。

俺が持っていた棒で、ゴブリンの振り下ろした剣を受け止めたため音が鳴ったのだ。

この棒どれだけ頑丈なんだ!?

俺はそう思いながらも、とっさに足を引き、力を抜く。

ゴブリン? はいきなりということで体勢が崩れた、その脳天へ俺は力を込めて棒を振り下ろした。

『グシャ!』

と音がするとほぼ同時に、ゴブリン? は前のめりに倒れていった。

「はぁはぁ」

ゴブリンが倒れてからすごく時間が経過したような感じがした、はっと我に返ると俺の荒い呼吸が聞こえた。

ゴブリンを見ると頭からかなり出血して倒れていた。

さすがにまじまじと観察はしたくないので、わからないが死んでいると思った。

俺は生き物を殺したのかもしれない。しかし嫌悪感は抱かなかった。それはこの醜悪な生き物の姿のおかげなんだろう。これが人間だったら、吐いていたかもしれない。

この状況に困惑していた俺に、

「あの、助けていただきありがとうございます」

と女性の声がかげられた。

先ほど助けた人は、女性だったらしい。状況が状況だったから気がつかなかった。

女性へと俺は振り返った。

「喜多、川……？」

その女性の顔は、転校生、喜多川聖と瓜二つの顔、だった。

3 一大樹（後書き）

続きはまた来週に。

4－異世界？

「あの？」

女性が訝しげな表情をしている。

「ああ、すみません。知り合いに似ていたものですから」

「そうなのですか？ 私はラースといいます。先ほどは助けていただきありがとうございます」

「俺は翔也といいます」

ラースというのは名で姓ではないだろうから、俺も名を名乗っておく。

「ショウヤさん…先ほどはありがとうございました。お礼を渡したのですが、今は手持ちが少ないので、私の連れが来たら渡させていただきます」

「それより、聞きたいことが」

「ぐおおおおお！」

ここはどこなのか？ そう聞こうとしたが、突如咆哮が上がり遮られた。

咆哮は先ほど倒したゴブリンがあげたようだ。ゴブリンは起き上がりこっちへと向かってくる。

「っ！眷族！？」

ラースが何やら声を上げるが、それよりもゴブリンだ。
俺は正眼に棒を構えた。

ゴブリンはめちゃくちやに剣を振り回しながら、俺に向かってくる。しかも何か黒いオーラがゴブリンを包んでいる。
意味がわからないが、とにかく迎撃する！

「はああああ！せいっ！」

めちゃくちやに振り回される剣の隙を見つけ、俺はゴブリンへと胴を打ち込んだ。

『グシャ！』

と音がするとほぼ同時に、ゴブリンは吹っ飛びごろごろと転がっていった。

俺は倒れているゴブリンへと警戒しながら近づいていったが、黒いオーラが萎んでいき、完全に黒いオーラが消えた瞬間、ゴブリンの姿も消えた。

後に残っていたのは、ゴブリンの持っていた持ち物、刃の厚い剣と鞘だけだ。

いったい何が起きているんだ？

ここはどこなんだ？

「……すごい……」

ラース、彼女にここがどこだか聞いてみよう。

もっとも俺が知らないところだろう。ここは間違いなく地球じゃない。もしかしたら俺は、本やゲームとかで見る異世界の迷い込んで

出しまったのかもしれない。いやきつとそれが答えだ。でも、それでもここがどこかラースに聞く。

「ラースさん、聞きたいことがあります」

「はい、なんでしょうか？」

「ここ、どこですか？」

「ここは東エルダリア地方の端の森です」

東エルダリア地方ってどこだよ。

「……この世界はなんていうんですか？」

「？アーシアですよ。誰でも知ってますよね。女神に作られた世界、女神の名アーシアが名づけられた世界」

……異世界、か。間違いない、絶対にここは地球じゃない。ゴブリンとかいるし、確信してしまった。

「はは、そうですね。いや森の中で迷っていたから、ド忘れしてしまっ、ははは」

「森の中で迷うって、大丈夫ですか？」

「まあ、はい」

「2回も助けていただいたお礼に、しばらくの路銀は渡させてもらいますよ」

「ええ、助かります」

何が原因だかわからないし、地球に戻る方法もわからないが、とりあえずこの世界でやれるだけやってみよう。まずはこの世界の常識とかを調べて、生きていくための糧を得て、戻する方法を探す。

妹とコンサートに行くって約束したしな、駄目かもしれないが戻るための努力はしよう。

「すみません、いろいろあって、記憶があいまいなんです。聞いたこととかあるんですけど、いいですか？」

「大丈夫です。ショウヤさんは命の恩人ですから」

「助かります」

おっと、その前にゴブリンの持っていた剣を回収しておこう。一緒に落ちている鞆に収めておくか。一

あれから聞けるだけのことは聞いた。

まずはこの世界のこと。

アーシアという女神が創造したことで、アーシアという名がつけられた世界。しかし、別の神が侵略しようとしたせいで、女神と侵略した神は相打ちになり、女神の作った生物（人、エルフ、ドラグーン）を無条件でモンスターが襲う。

女神勢力はこれと戦い続けている、がその戦いはいつ終わるのかもわからないということ。

侵略神勢力には、先ほどのゴブリン、以外にリザードマン、ハーピーがいる。

ゴブリン、リザードマンは女性を襲い、自らの仔を産ませようとする。逆にハーピーは男性を襲い、仔を作ろうとする。

人間は寿命が短いが繁殖力、応用力があり、女神勢力で一番数が多く、エルフは長寿だが繁殖能力が少ない。ドラグーンは個体数が変わらず。死ぬときに自らを転生する形で、卵を生み出し、すぐその卵は割れてドラグーンが生まれる。そのため個体数が変わらない。約1000年前に人間勢力が、強大な魔力で身体を改造し、ドラグーンを超える戦闘力を持つ魔族を生み出し、侵略神勢力を駆逐しようとしたが、なんとすべての勢力を支配しようとして、人間勢力に反旗を翻した。しかし、聖女と呼ばれる強大な魔力をもつ女性が、魔族を倒した。以後変わらず、侵略神勢力と戦い続けている。

これが大まかなこの世界の歴史だ。

そして、魔法のこと。

魔法は、ゲームの魔法そのものだ。

地水火風があり、すべてはこの応用であり、以外の属性はない。

ゼロ〇〇〇〇魔みたいの人に人によって得意な属性があり、才能がある人間だと、複数の得意属性がある。同一属性を足せばより威力がある魔法が使える。これはダブル、トリプル、クアドラプルと同じ。しかし、より才能があるものは、複数属性を足して使うことができる

る。それは同一のものより応用力、威力に優れる。それをマルチクラスと呼ぶ。マルチクラスはライン、トライアングル、スクウェア。同一属性しか使えないものをシングルクラスと呼ぶ。火と風のラインだと、火－火、火－風、風－風、風－火が使える。もつとも目安であり、風－風、風－火は使えない火と風のダブルも存在する。そして属性を足せないレベルのことをドットと呼ぶ。

これがこの世界の魔法だ。

ラースは全属性のドット、全属性に才能があるが今はドットではないレベルらしい。

「……と、これで魔法については終わりです」

「ありがとう、なんとなく思い出したような気がしないでもない」

「…それって、要は思い出していないってことですよね……」

「まあ……」

「はあ、仕方ありませんね。私と連れはこの後近くの村に行き、ゴブリン討伐を報告します。その後、ギルドのある街へ行き報酬を貰いにいきますが、それまで一緒に行きませんか？ゴブリンを一人で倒せるぐらいなのですから、足手まといにはなりませんし、私達は特に困ることはないでしょうから」

彼女は悪人とか犯罪者には見えないし、今の俺はこの世界のことをまったく知らないし、もし彼女が悪人だろうとしても一人で放り出されるよりはましか。

「それなら、お願いできるか？」

「はい、だいじょうぶですよ」

「なら、しばらくの間世話になる」

俺が敬語を使用していないのは質問をする前に敬語ではなくても良いと言われたからだ。俺は基本、初対面の人間には敬語を使う、無駄に敵対心を持つ人間もいるから、下手に出るのは悪いことではないとおれは常々思っている。

「ライス様！」

ラースを呼ぶ声が遠くから聞こえた。

声が聞こえた方を見ると、なんと、東先輩に瓜二つの女性がいた。女性は、ゲームの中の騎士のような格好をしている。背中には槍が固定してあり、剣も帯刀しているが、小太刀よりも短い剣だ。それと左手にはなにやら布の包みを持っている。

それにしても、本当に東先輩に瓜二つ……いや、髪の色が違う。

東先輩は日本人で当然髪の色が黒だが、女性は金髪……そういえばラースは青色の髪だ。そして二人とも少し大人っぽいというか、歳がすこし上な気がする。

いったい何なんだろうこの世界は。出会う人すべてが俺の知っている人達なんだろうか？

……村に行つて知らない人がいるなら、偶然この二人が瓜二つだったかもしれないし、今は気にしても仕方ないか。

「セリア！こっちよ！」

ラースの声でこちらに駆け寄ってくる、セリアという名の女性。

「ご無事でよかった」

「実はこの人が助けてくれたのよ」

「それは、感謝します」

「ああいえ、こちらも事情がありました」

「実はこの人森で迷っていたらしいのよ。しかも記憶が曖昧になってしまっていて覚えていないらしいの」

「それは…大変ですね」

「だから、ギルドのある街まで一緒に行こうってことになったのよ」

「レース様!？」

「それとね………」

レースがセリアという女性になにやら耳打ちしている。
女性はこちらを一度見ると、

「…そういうことなら仕方ありません。あなたの同行を許します。
私はセリア、元教会の騎士で今は冒険者をしております」

と、俺の同行を認めてきた。レースは何を言ったのだろうか？
それと教会の騎士？またなにやら単語が出てきたな。

「翔也です。いろいろご迷惑をおかけすると思いますが、よろしく
お願いします」

「いえ、それより早く村に戻りましょう。ゴブリンを討伐したことを報告しないと、彼らが安心できません」

「そうね、あつ、そういえば教会についてはショウヤさん覚えている？」

「いや、覚えていない」

「それなら、また村に戻った後で、説明しますね」

「ああ、後、敬語じゃなくてもいいぞ。呼び方も呼び捨てでいい。セリアさんも」

先ほどセリアさんに話していたときは敬語じゃなくなっていたしな。

それに、こういう冒険者っていうのか？基本パーティーでは呼び捨てっぽいしな。この世界ではどうかかわらんが。

「ショウヤがそう言うなら、わかったわ」

「わかった、ショウヤ。私も呼び捨てでいい。では、村に戻ろう。ラーズ様は私の後ろに、ショウヤはラーズ様の右にいてくれ」

セリアが戦闘を歩き、次にラーズが、その右に俺がついていく形で、道っぽい地面を歩いていった。

5 一帰還

ラース達と出会った場所から、土の道がある草原をかなりの時間歩いている（かなり早めの歩調で話しをするような暇はなかった）と、道が開けている林のような場所に着いた。

着いたときにはもう日が暮れる時間帯だった。

「この先に村がある。ゴブリン討伐の証として、ゴブリンの首を持っていく。その後は、今日は村に泊まり、明日の朝早くから東エルダリアの街に向かう」

「ここから東エルダリアの街まで歩いていくとけっこうな日数がかかりますけど、馬車で行くのでそれほど時間はかかりませんよ」

「エルダリアは神聖イース国でも教会の騎士団がそれほどいないから、なにかあったときは大抵ギルドに依頼がくる。ギルドへ依頼達成したことを村の人間が伝えなければならなら、私達も便乗するんだ。商人が定期的に村に薬草を調達しに来ているのだが、その商人の馬車にわれわれと村長の息子が便乗させてもらうことになっている」

なるほど、ギルドはゲームでよくある依頼とかがある所か。ここは神聖イース国のエルダリア地方？でほかの地方は教会の騎士団が治安を維持しているが、この地方はギルドに所属している冒険者が問題—（依頼）を解決する形なのかな？

「もしかして、ギルドのことも忘れているのか？」

「そうみたいだ」

「うーん、それなら、明日から馬車の中で移動するし、モンスターもさすがに道にはいないはずだから、馬車の中で教えてあげるわ」

「助かる」

「今日は疲れたから、報告したらご飯食べたらずぐに寝ましょう。あ、シヨウヤは洗淨の魔法も覚えてないわよね？」

「ああ」

「普通ならお風呂に入ったほうがいいんだけど、こういう村はお風呂とか毎日使っていないし、私達だけが使うのはできないから、水のドットレベルで使える洗淨の魔法があるの、これなら汚れもある程度は落ちるのだけど、私がかけてあげるわ」

「私は土と火のラインだから、洗淨の魔法はラース様に任せている。遠慮はするな、これは冒険者なら当たり前の担当だからな」

「わかった。よろしく頼む」

魔法はそんなこともできるのか……ぜ〇魔みたいに結構便利なのかもしれないな。

「では村に入るぞ」

セリアについていき、村に入った。

林の中に村があるようで、入り口付近には一応見張り役なのか人が一人立っていた。

「おお、冒険者さん。無事に帰ってきたようだね。それにその包み、成功したらしいね」

「ああ、村長にこれを渡しに行って依頼は終わりだ」

「じゃあ、早速行ってやるといい」

「では」

再びセリアについて歩いていく。

村はゲームとかに出てくるような村だったが、結構綺麗な感じがする。家は1階建てだが結構大きい、木とレンガみたいな石で作られている。

家の数は30軒ほどで、家と家の間は10メートル以上は離れている。

人はかなりの数がある、昔はそういうものだって本とかで読んだこともあるし、たぶん一軒にかなりの大家族が住んでいるのだろう。

しかし、この世界の村では普通なのだろうか？ いまいち規模がわからない。

歩いていると、一番大きな家の前に着いた。たぶん村長の家なんだろうな。

『コンコン！』

とセリアが少し強くノックをすると、若い女性が出てきた。

「あら、冒険者さん」

「村長を呼んできてくれないか？」

「わかりました」

女性が村長を呼びに行き数秒で、40代の男性が出てきた。

そういえば、村の人は俺の知らない人ばかりだ。駒田さんとか出てくるかと思ったのに。

この世界と地球は関係なんてなく、ただ偶然二人が知り合いに似ていただけなんだろうか？

「どうも。おお、その様子だと討伐は成功したみたいですね」

「ええ、これがゴブリンの首です」

セリアが包みを村長に渡す。

村長は包みを少しだけ開き、中を見た。

「確かに、これはゴブリンの首です」

「では、予定通り明日」

「はい、馬車で東エルダリアの街に息子と一緒に行って下さい。ああ、今夜も昨日と同じ家に泊まって行って下さい。では明日の日の出前に村の入り口に集合してください」

「わかりました」

村長は家に戻っていった。

「では、我々も休ませて貰おう」

「ただで泊まれるのはいいんだけどねえ……」

「なにかあるのか？」

すごいぼろぼろだとか？

「ああ、実は私達は空き家にただで泊めてもらえたんだが、その家の家族は全員ゴブリンに殺されてしまったんだ。小さい子供がいな家族だから畑仕事で一家全員で畑にいたらゴブリンが出てきて、全員……というのがあったわけだ」

「化けて出てきそうで、ちょっとね」

「セリア様、魔法で思念を残すことなどよほどの者じゃなければできませんし、思念を残しても伝言ぐらいしか残せません。幽霊などこの世には存在しませんよ」

「わかってるけど、気持ち的にちょっとね……」

「まったく、しっかりしてくださいあなたは、おっと」

俺がいることに気がついてセリアは口を閉じた。

この二人、絶対ワケありだよな。ラースなんて様付けだし、セリアも元騎士だけどまだ現役っぽいし、ラースが高貴な血を引いていてその護衛って感じだ。このパターンはいかにも、だよな。

事実は小説より奇なりと言うし、案外俺の想像は当たっているかもしれない。

「とにかく、私は平気ですが、二人は疲れたはず。早く休みましょ

う」

「確かに、ね。こんなに冒険者が疲れるとは思わなかったわ」

「俺も、腹が減ったし、早く眠りたいな」

休めると思うと、張り詰めていた気が緩んだのか、どっと疲れが襲ってきた。

思っている以上に疲れていたんだろう。

「こっちだ」

セリアについていくと、他の家と変わり映えない家に着き、そのまま家の中に入った。

中は床と壁がレンガのような石でできており、一部の床と壁が木でできている。

それと何部屋かに分かれており、玄関は物置兼用になっている。奥に進むと食事をする場所兼キッチン？になっていて、あとは寝る場所だ。ベッドがあるが、布団は石と木でできた台に安っぽい布団が置いてあるだけだ。夫婦で使うことが基本なのかダブルベッド並みに大きい。

そして最後にトイレだが、中世時代風にしてはすごく綺麗なトイレだった。なぜだろうか？

「とりあえず食事にしよう」

「この家の畑のものを食べてもいいってことになってるの、だから朝のうちに収穫しておいて家においてあるわ。その分依頼料がすごく安い依頼だったんだけどね」

「野菜はかなりの量を食べても良いということでしたし、結局総合すれば他の依頼と同じような利益です。それに依頼料が目的ではないから問題ありませんよ」

「腕試しというか、私が実戦訓練を積むためだったしね」

セリアは料理に慣れているのかてきぱきと用意する。

俺も料理はできるが、さすがに食材がどういったものかわからないし、火のつけ方もわからないので、座って待っていることにした。

「ですが、まさかライス様の御命が危険にさらされるとは思いませんでした。次からはもっと安全に気をつけるようにしませんと」

「そうね……」

やっぱりワケありだよなこの二人。

うん、一応聞いておこう。もちろん全部話してはもらえないだろうが、ワケありだということぐらいははっきりさせておきたい。なにかあったときに空気読むのに必要だし。

「やっぱり二人はワケありなのか？なぜそれを？っていうのは聞くなよ。セリアがライスに様付けしているし、バレバレだ」

「あはは…うん、まあ、いろいろとあってね」

「すまんが内容は言えん」

「いや、今日会った人にばらすほうがおかしいし、別にいいさ」

っていうか、この二人街の中とかで普通に目立ってそうだ。それ

とも冒険者だから気にされないのかな？

「そろそろだな」

話しているうちに料理が完成したのだろう。

セリアが鍋ごと机の上に置いた。それとそれぞれに木でできたお椀とスプーンを置いた。

そしてセリアがそれぞれのお椀にスープをよそおった。

「では夕食にしようか」

「そうね」

と二人は食べ始める。

いただきますは日本人だけしか言わないし、この世界の人は食事の前にお祈りとかもしないのか…。

（いただきます）

俺は心の中でいただきますと言ってから、食べ始めた。

スープは半分以上が野菜でできており、ボリュームたっぷりだ。

味は塩のみだが、こっちの世界で起きてからずっと食事をしていなかったなので、すごく美味く感じる。

鍋には3人以上の量が入っていたので、結構な量をおかわりしてしまった。

「ショウヤは男だし、量を多くしておいて正解だったな」

「いや、何も食べていなかったからつい」

「すごい食べっぷりだったものね」

おっと、ごちそうさまと言わないと。

(ごちそうさまでした)

食事のときの作法は駒田さんに徹底的に教えられたおかげで、必ず『いただきます』と『ごちそうさまでした』は言うようになっていく。それに箸の持ち方なんかもかなり綺麗に使える。焼き魚も綺麗に解体できるし。

「さて、明日は早いし、もう寝よう」

「そうね、じゃあ、洗淨の魔法をかけるわ」

ラースがなにやらぶつぶつと呟き、

「クリアランス！」

と言うとセリアが一瞬青い光に包まれた。
たしかに魔法だ……………。

「じゃあ、シヨウにもかけるわよ」

とまたぶつぶつとつぶやき、

「クリアランス！」

と言った。

たぶん俺もさっきのセリアと同じように青い光に包まれたんだろ

う。しかし一体何か効果はあったのだろうか？

「不思議な顔をしているな」

「いや魔法だとはわかったけど、効果がいまいちわからなくて…」

「…そうだな、自分の匂いを嗅いでみろ」

言われるまま匂いを嗅ぐと何も匂いがしない！？

ちよっと待て、俺結構歩いていたし、ゴブリンとの戦いでかなり汗を掻いたぞ！？なのに匂いが何もしない……

「それが洗淨の魔法の効果だ。元は軽い毒とかを解毒する魔法だが、こんな使い方を編み出した魔法使いが昔いて、あまりに便利なため一気に広がっていったらしい」

ま、魔法 s u g e e e e e !

「私の火属性は料理するときとか暖をとるときとかは重宝するし、魔法は何も戦闘だけで使用するものではない。生活においても重宝する」

「すごいな」

「お前が忘れているだけだ。洗淨の魔法なんてこの村にも使える奴が一人はいるはずだ。ラインとかダブルはそれこそ勉強とかする必要があるが、ドットの初歩の魔法なんて、ちよっと練習すれば使えるようになる。もちろん戦闘では役に立たない魔法ばかりだがな」

トイレが綺麗な理由ってもしかして魔法のおかげなのか……………？

「私は全属性が使えるから、生活していただけなら、本当に楽なのよ。水も火も自由に出せるし、家も土の魔法を何度も使用すれば建てれるし、風の魔法で畑を害鳥から守ることもできるしね」

やっぱり魔法sugееее!

使うようにっては生活水準がかなり高くなるんじゃないのか？
……俺も使えるようにならないかな？簡単な魔法なら誰でも使えるらしいし、聞いてみるか。

「俺も魔法を使えるようになるかな？」

「それは大丈夫だ。人は必ず一つは属性を持っているし、その属性の初歩の魔法なら、ちょっと練習すれば使えるようになる」

「明日、馬車の中でショウヤの属性を見てあげる。私なら全属性だから魔法も教えてあげれるし、練習方法を教えてあげるわ」

「頼む」

「では、また明日だな。おやすみ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

俺は、割り振られたセリア達とは別の部屋に行き、ベッドに横たわった。

今日はいろいろあった、不安も大きいが魔法を使えるようになるとか、ワクワクしていることもある。

元の世界のことやこの世界のことを考えていたら、すぐに眠気が襲ってきた。

とりあえず、この世界で、頑張っ、み、よう……………Z Z Z……………
…Z Z Z……………

『ピピピ！ピピピ！』

もう朝か……………。

『ガチャ！』

いつもどおり俺は目覚まし時計を止めた。
？

あれ？

目覚まし時計？

ここは！？

俺は一気に意識を覚醒させると部屋の中を見回した。

間違いない、ここは俺の部屋だ。

頬をつねってみるが、痛みがある。夢じゃない。

そんな……ならあれは、あの世界、アーシアでの出来事は夢だったのか？……いや、でも……。

わからない、状況を考えるとあれが夢だったと判断できる、してしまう。でも、俺にはどうしても夢に思えない……？

考え込んでいたら、手に何か硬いものが当たった。

ベッドの中に何か入っているようだ。布団の中から硬いものを取り出す。

俺の手が掴んだもの、それは、アーシアで大樹から折った枝、だった。

6 ー再び日常へ

「あいうえお君」

「はい」

「かきくけこさん」

「はい」

「もう出番ない君」

「はい…」

いつもの日常。

ヨーコ先生が出席を取っている。

俺はそれを聞きながら、窓の外、晴れ渡る空を眺めながら俺の身に起きたことを考えていた。。

夢のはずのアーシア、そこで持っていた棒が俺の部屋にあった。

いったいどういうことなんだろうか。

わけがわからない。

俺は昨日の夜、眠ったらなんらかの不思議な力でアーシアに異世界迷い込みをした。そしてアーシアで眠ったら元の世界へ戻ってきた。世界移動の際に身に着けていたものは持っていなかったが、棒はこちらの世界に俺と一緒に移動した。

……さてよ？もしかしたら、もう一度眠ったら、今度はアーシアで目覚めるのではないか？

そうだ、もしアーシアで目覚めることがあれば、とりあえず眠ると世界移動するという法則がわかる。理由まではわからないがそれ

ならこちらの世界に戻ってこれるのだし、とりあえず落ち着くことができる。

もし、アジアに再び行くとができなかったら、棒の存在は謎のままだが、問題がなくなるのだしそれはそれでいい。今は何もわからないのだし、夜に眠ったら世界移動するかどうかで対応を考えればいいか……。

「喜多川さん」

「はい」

喜多川の名前が聞こえ、喜多川を方を反射的に見てしまった。

じっと喜多川を見ていると、やっぱりラースと瓜二つだと感じる。髪は喜多川のほうが長いし、黒髪だ。それに喜多川のほうがクールな感じがするが、顔はやっぱりそっくりだ。

「……………君！」

「中……………也君！」

「中野翔也君！」

「はいっ」

「もう、朝だからってぼーとしさないの！」

「すみません」

ついつい喜多川の顔をラースの顔を思い浮かべながら見つめていたら、思った以上に集中していたようだ。いや、今日の俺は混乱し

ているのか平静ではないだけか……。
ふう、落ち着こう。今は考えても仕方ないのだから。

「それで、今日の翔也はどうしたん？なんかぼくとしてるし、喜多川を見つめていたけど、恋とかそういうのじゃないっぽいしさ」

いつものように学食で明と食事をしようとしたら、俺の様子が変わったことを明が聞いてきた。

「あゝ、ううーん……」

俺にもわけがわからないし、いくらこいつでも昨日のことを話すのはなあ……。

「俺にも何が起きてるのかよくわからん。もしかしたら話すかもしれないが、しばらく俺は変な状態が続くがいつものどおりの対応で頼

む」

「うい、よくわからんが了解」

とりあえず昼食だ。一番高いがおいしいスペシャルセットを頼んだんだし、味わって食うか。

今日の朝はいつもより早い時間に起きたのだが、混乱していたため、ジョギングはしなかったし、当然弁当も作らなかった。妹には風邪でも引いたと思われたのか、『うつさないでよね』と言葉とともに、『無理しないで今日は学校休んだら?』と言う言葉をいだいた。

いつもどおりの日常を確認したくて学校に来たが、やっぱり落착かなかったなあ。結局、朝からふと気づくと呆としてしっていたことが多かったし。

ああ、駄目だ。また呆としてしまう。とにかく飯だ!

「やっぱ、今日の翔也はどっかおかしいっすよ」

うっさい。いつものお前のほうが変だろうが、変人め。

『ざわ…ざわ……』

スペシャルセットを食べようとしたら、急に学食がざわめきだした。

何が起きたのだろうか?

「ウイ?もしかしてあっちにいるのは喜多川ちゃんじゃないですか
い」

間違いなく喜多川だ。一緒にいるのは、昨日隣の席になって女神

発言したクラスメイト——（女）だ。名前は中村さんだったか？覚えていない。

「学食にきたのかあ。購買部は戦争だから避けたのかねえ」

購買部か：あれはなあ、本当に戦争だ。俺は一度も利用したことがないが、購買部の戦争を見たことがある。

学園の購買部でパンが売られるのは昼放下の時間だけだ。それならコンビニとかで買っておけばいいと思うのだが、学園のパンは学食と同じようにものすごい安い。コンビニの半額で売っている。そのため、昼放下の始めの購買部は昼食代をおさえて小遣いにしようと思っている生徒達がひしめき合う戦場と化す。

一度明が挑んでいたのを見学していたが、絶対俺は購買部は利用しないと誓ったものだ。

「あれ、おいおいおいー！」

つと購買部について思い出していたら、明が奇声を上げた。

「どうした？」

「隣の席、いいかしら？」

そうやってきたのは、喜多川だった。

「ああ」

喜多川は俺の席の隣に座り、女神発言のクラスメイトは明の隣で、喜多川の正面に座った。

ちらりと見えたが、喜多川は和食セットを持っていた。女神発言

のクラスメイトはきつねうどんだ。

「いただきます」

二人はそう言って、昼食を食べ始めた。

「……」

「……」

「……」

「……」

なぜか無言になった俺と明も、それぞれの昼食を食べる。

「……」

「……」

「……」

「……」

ひたすら無言で食べ続けていたら、すぐに食べ終えてしまった。
ここにいても空気が重いし、教室に戻って明と駄弁っていいようか
と思ったそのとき、

「あなた、中野君だったよね？」

喜多川が話しかけてきた。

「そうだけど？」

「：私、こっちに引っ越してきたばかりだから、どこにどんな店があるかとか知らないの。案内してもらえないかしら」

……は？

いきなり何を言っているんだろうか？
断ろうか。

「いいけど、何時？」

そう思ったのだが、なぜか口から了承の言葉が出ていた。
身体が勝手に反応した。そんな感じだった。

「そうね、今週の土曜日とかはどうかしら？」

「大丈夫だ」

「そう。よろしくね」

「ああ」

なぜだろうか？彼女と話をしていると勝手に言葉が口から出てしまう。

本当にわけがわからないことだらけだ。

「それと、外村さんも一緒に来てくれないかしら？」

「うん、女神さんのお願いだし、私は大丈夫だよ」

「おいおい、俺は？俺は？」

明、ブレないな。

「別にいいけど、これ以上増えるのは勘弁してほしいわ」

「いよし！」

「じゃあ、土曜日は10時に学校の前で集合ね」

そう言ったすぐ後で、

「ごちそうさま」

と言って、食器を返却しに行った。

「女神さん、待ってよ」

そう行って、外村さんも一気にうどんを平らげると喜多川を追いかけていった。

「……………」

「……………」

「どういうこと？」

「俺に聞かれても」

「わけわっかんねー」

「奇遇だな、俺もだ」

俺達は始業準備のチャイムが鳴るまで、俺と明は食堂で頭を抱えていた。いくらこの変人でもこの事態は予想だにしまったらしい。いったいなにがどうなったら、面識のない転校生から、街を案内してくれなんてたのまれるのだろうか？そしてそんな事態を予想できる人間がいるのだろうか？昨日からわからないことばかり起きる。もう頭がパンクしそうだ。

はぁ、午後の授業は寝て過ごすか……って眠ったらどうなるのかわからないし、起きてるしかないか。
はぁ。

俺は何度もため息をつきながら教室へと戻っていった。

俺は棒を握り締めながら、ベッドで横になっていた。
そしてにしても今日は混乱してばかりだったな。しかし、もうすぐアーシアが夢だったのか、現実だったのかがわかる。

平和ではない非日常への扉が開くかもしれない不安と、普通では
味わえない非日常への扉が開くかもしれない期待を胸に、俺はまど
ろみへと意識を沈めていった。

7ー再びアーシアへ

ここ、は？

ここは俺の部屋？

それとも……

そう思った瞬間、ガバツと身を起こし、回りを見た。

レンガのようなものでできた壁、硬いベッド、壁に立てておいた剣。

ここは……アーシアだ。

そう、この世界は夢ではなかった。

とはいってもなぜこんなことが起きているのか原因は未だ不明なのだが、まあいい。眠れば自室で起きるんだ。ゴブリンもいるし、ちよつと危険だが、魔法が使えるようになるかもしれないし、異世界観光とでも思っただけで楽しもう。

この世界に慣れたら、原因を探すようにすればいいか。

さて、今日は日の出前に出発すると言っていたから、起きるか。

俺は部屋を出た。すると、セリアが朝食を作っていた。

「ああ、シヨウヤ、おはよう」

「おはよう、セリア」

とりあえず昨日と同じ席に着く。

「もうすぐ、朝食ができる。ラース様ももうすぐ起きてくるころだ」

とセリアが言うなり、

「おはよー」

とダレた声でラーズが部屋に入ってきた。

「おはようございます。ラーズ様」

「おはよう。セリア」

「おはよう。ラーズ」

「……おはよう。ショウヤ」

今、こいつ誰だっけって顔になったぞラーズ。朝に弱いのか？つてまだ日の出前だし仕方ない、のか？

「じゃあ、朝食にしましょうか。ラーズ様！馬車の中で寝てもいいですから、今は起きてください！」

「うう、ん。わかった」

ラーズが席に着くと朝食を食べ始める。献立は昨日と同じ野菜スープだった。

「街へ行けば肉も食べられるし、時間がないからこんな料理しかできなないんだ」

野菜スープを見た俺はたぶんげんなりした顔をしたのだろう。そんな俺を見てセリアが言った。

「いや、文句があるわけじゃない。もしかして、皆毎日このメニューなのか？って思ったんだ」

「さすがにそれはおかしいだろう……ああ、おまえは森で遭難して記憶が曖昧になってしまっているんだったな」

「ああ。それにしても街に着いたらこの服装を何とかしたい」

未だパジャマだし。汚れは魔法で取れたんだろうが、普段着がこれではいくら異世界だからといってもな。

「本当にとんちんかんな格好だ。中流階級以上の人間が着るようなパジャマに、古いが高級そうな具足。そして、かなり魔力を秘めた棒か。まったくお前と言う人間がわからんな」

「俺にもわからないんだから仕方ないだろ」

こんなんでこの世界でやっていけるのか？

「はははっ、それはそうだ。まあ、ゴブリンを1人で倒せる腕前なら冒険者としてやっていけるだろうし、そう不安そうな顔をするな」

「そうか。そうだな」

俺が不安な顔をしたのをみたセリアはそう言った。

セリアは性格も東先輩に似てるなあ。なんというか武人みたいなところと、武骨と言うわけではなく、それ以外にも得意なことがあるところとか。

「さて、時間はそれほどないし、さっさと食べてしまおう。ラース様も」

「わかった」

「わかったわ……」

『パカパカ』

という馬が歩いている音と、

『ゴトゴト』

と馬車にな引かれていく音がする。

日の出前に馬車に乗り込み、東エルダリアの街へのへと移動中だ。
2、3日かかるが、朝早くに出発すれば明日の夜には到着することだ。今日の夜は野宿だ。

もっと揺れるのを想像していたが、一応道はあるのかそれほどは揺れない。

「さて、ラーズ様が寝ているし、何か質問があるなら、私が答えよう。魔法のことについてはラーズ様が起きてからだな」

ラーズは何で冒険者なんてやっているんだろうか…？
まあいい、それよりこの世界のことだ。

昨日出てきた単語でわからないこと、教会、ギルドのことを聞か。

「そうだな、まずは教会って何なんだ？」

「それも忘れているのか、まあ魔法も忘れているし仕方ないか」

あきれたような顔をしたが、説明してくれるようだ。

「私達女神勢力と侵略神勢力が戦っていることは知っているな？」

「ああ、昨日ラーズから聞いた」

「…約1000年前、侵略神勢力に対抗するため、高い魔力を持つもの、まあ、スクウェアクラスの人間達が身体を改造する魔法を作った。それは成功し、強大な力で侵略神勢力を駆逐していったんだが、彼らは力に溺れ、女神勢力と侵略神勢力、両方を支配しようとした」

なんかのアニメのコーデいなんとかみたいなものか？

「当然、女神勢力は抵抗した。侵略神勢力はなにか行動するほどの余裕はなく、女神勢力と彼ら、魔族との戦いが始まった。決着は数年後についた」

って、早いな。今女神勢力があるってことは魔族はあつという間にやられたのか。

「当時、魔族化する魔法を使用することに反対していた、女神勢力最大の魔法使い、後に聖女と呼ばれた女性が身を犠牲にして魔族を滅ぼした。その女性は魔族を倒せるほどの力を有していたながら、侵略神勢力との戦いでのみ力を行使していた。その力に溺れない意思から彼女を聖女と呼ぶようになり、以後、魔族のような力に溺れたものが出てこないよう、もし出てきたら倒滅するための組織ができた。それが」

「教会ってことか」

「そうだ」

「じゃあ騎士と言うのは？」

「教会の有する軍事力となる者達のことだ。魔法でも武術でも一定の戦闘力を持っていること、犯罪を一度もしていないことや礼節、また一般の民達への接し方などの心理を確かめられ、すべての条件を満たしたものがなれる」

魔法を使えばそういうもできるんだろうな。

「もっとも、今の教会の一部は腐敗しているがな」

ワケありの理由、かな？

「これで教会の話は、っと、そうだ、この国のことを話さなければ

ならないな。今いる国は神聖イース国、聖女イースの名から取っている国で、イース教会の本部もある国だ。教皇と国王は兼任だ。一部の上層部は腐敗しているが、国王になるには侵略神勢力との戦いを経験しなければならなかったため、王族は腐敗することがない。だから一部の上層部が腐敗していても大勢に関係しないな。それほど王族にはきつい義務が課せられている。だからこそ強権を持っていても民は王を絶対的に支持している」

そりゃ人類の敵と戦わないといけないなら権力争いとかできないしな。もちろん一部の人間はしているのだろうけど。

「昨日の依頼も、本来なら国に騎士団か教会の騎士が対処するのだが、どちらも侵略神勢力圏内への侵攻へかなりの数が遠征している。だからギルドへ依頼がいったんだ。この国のギルドは今のような状況だと繁盛するが、いつもは冒険者はほとんどこの国にはいないな。あ、国の騎士団は教会の騎士団とは別だ。これは誰でも入れるぞ、騎士になるには真面目に数年以上は仕事、警備や討伐をしていなければならぬがな」

なるほど、ね。

「何か質問はあるか？」

うーん……教会について、今俺が聞かなきゃならないことはないな。

ギルドに聞こう。

「教会についてはない。次はギルドについて教えてくれないか？」

「ギルドか。要は何でも屋だな。依頼者は報酬とギルドへの依頼料

を払い、依頼をギルドが紹介した冒険者に解決してもらい、ギルドで報酬を冒険者に払ってもらおう。もし、依頼者、冒険者が違反した場合はギルドが罰を与える。依頼が第一の組織で、絶対に違反などはない組織だ。何せ違反すれば冒険者全員が敵に回るからな」

まあ、要は派遣元ってことか。依頼を紹介するだけで金が入るし、解決してもらえば信用される。次の依頼がくるし、問題なんて起こせないだろうな。それでも問題は起きるが、大きすぎる組織だからつぶれないのかな。この世界は地球とは状況が違いすぎるし俺の常識で判断とかならないほうがよさそうだ。

「この世界が創造されてから約4000年も経っている。歴史のすべてが書に記されているわけではない。魔族以外にも魔法の研究をしていた魔法使い達の遺跡とか、侵略神勢力が拠点としていたりとか、意外な場所にあったりする。そういう場所を探し、力を示し、富を、名誉を得ようとする人間達を管理する組織、それがギルドだ。教会ができる前から設立されているほど歴史がある」

「いくらなんでも、そういう場所は少ないんじゃないのか？」

「安全圏内、この国なら北と西ならそうだが、もと侵略神勢力圏内や、侵略神勢力圏内が近い場所はそれほど探索はされていない。昔、北方の大国が侵略神勢力に滅ぼされてしまい、以後数百年間も侵略神勢力にされていて、女神勢力が取り戻したときは、何十年とかけて冒険者が探索、討伐したんだ。いくら女神勢力が勝っても、すべての場所を防衛するほどの軍事力はないからな。まずは民の安全を確保、そして手に入れた領土を広げていくんだ。侵略神勢力も勝てないようなところへは姿を現さない、大敗したら安全圏内を防衛する。しかし、一部のモンスターは冒険者と同じように危険を冒して来るし、森や山の中に潜んでいる場合もある。簡単に言えば、国で

は専守していないときは守れる場所に限度があり、そのための防衛力を冒険者が個人で担うといったところだ。国によっては、平民では絶対に騎士になれない国があったり、選民思想がある国があるからな、そういう国の出身者で実力があったり、嫌気が差した兵士が冒険者になることが多い」

まあ、魔法があるし、個人の強さがかなりばらつきがあるんだろうな。だから集団で行動するメリットが地球より少ないのかもしれない。

「っと、冒険者についても説明してしまったな。これで質問は終わりだ。そろそろラース様も起きるころだし、次は属性と魔法についてラース様から聞いてくれ。私は運転を交代してくる」

「わかった」

セリアが出て行くとともに、村長の息子が馬車内に入ってきた。そしてすぐに寝始めた。農民でも朝はつらいのか、それとも馬車を運転するのがか？

この世界の常識を知らない俺にはどちらかわからなかった。

8 魔法

「じゃあ、早速、属性を見てみましょうか」

よほど疲れていたのか、日の出から少し経ってラースは起きた。そして水の魔法で汚れを落とし、顔を洗い、ようやく意識がはっきりしたのか、昨日言っていた属性を調べようと言ってきた。いろいろ突っ込みたかったが、それより属性と魔法についての興味が勝り、俺は何も言わなかった。

「頼む」

「じゃあ、早速」

ラースが眼を瞑り、俺の身体を触りながら、なにやらぶつぶつと言っている。

しばらくぶつぶつと言っていたが、終わったのか、眼を開けた。

「うん、どうやら翔也は全属性が使えるみたい」

「そうなのか！？それはまたすごいな」

「私も同じだから驚かないけど、私達と同じ全属性はこの国でも数人しかいないということらしいの」

「そうだ。一人を除いて、皆教会の騎士だ。もう一人は元騎士だったが、今は冒険者としてあちこちを旅しているらしいな」

たしかにほんの数人しかいないのなら、天賦の才と言えるが、あ

まり実感がわかないな。

この世界に慣れていけば、わかるようになると思うが……。

「そう、言われてもいまいちわからないな」

「そうよね、そういわれてもわからないわよね。私は全属性だけどドットクラスだからというのもあるけど」

「全属性に適正があるだけで、魔法大国と呼ばれる国の魔法学院では入学試験免除、授業料免除になる。この魔法学院は試験さえ受ければ各国人間にも魔法を教えている。学院を卒業しているだけで、即騎士になれるほどのステータスだ。その学院の入学試験免除、授業料免除だぞ、それだけ全属性に適正がある人間は少ないんだ」

つまり東大とか志望すれば入れるようなもので、授業料免除……
ああ、それはすごい。

それにしても魔法学院か、もしいけるなら行ってみたいな。世界移動の謎を解く鍵がありそうだ。

「そうだな、記憶が完全に戻らなかったら、魔法学院に行ってみようかな？それならただで授業を受けれるし、その後の生活もずいぶん楽になりそうだし」

「それも一つの手だな」

「そうね、もしもの時はそれもいいかもね」

「魔法の実践については、夜は野宿するから、そのときに教えるわ。今のこの揺れの中だと、初心者には練習するのもきついからね」

「わかったよ」

「私は夜の見張り番をしなければならぬから、今のうちに寝させてもらう」

見張り番か、俺もしたほうがいいよな…不安だけど。

「見張り番、俺もしたほうがいいよな？」

「……そうだな、だが、お前は本調子ではないし……よし、ならば就寝時間以降、2時間ほど見張り番をしてみよう」

「私は？」

「ラース様は遠慮してください。あなたの分は私が行いますので」

「もうっ、私だっていろいろ経験したほうがいいのに……」

「それはまた次の機会に、です」

「…はあ次は絶対よ」

「では、私は眠らせてもらいます。もし、モンスターの襲撃があればすぐに起こしてください」

「ああ」

「では」

セリアは馬車の壁にもたれかかっている体勢で眼を瞑った。

うるさくするのも何だから、俺は馬車の後ろから流れていく景色を眺めることにした。

道中、何事もなく、日が暮れるまで馬車での移動は行われた。
今は、完全に火が落ち、焚き火を囲みながら食事を暖めているところだ。

「よし、完成だ」

調理していたセリアがそれぞれのお椀によそあっていった。
今日も昨日と同じスープだが、中に燻製の肉が入っているし、硬い日持ちするパンもついていて、それをスープに浸して食べるようだ。

俺は『いただきます』と心の中で呟いて、食事を開始した。
味はいつもの食事と比べると味気ないが、それほど気にはならな

かった。キャンプしている感じだからなのかもしれない。

それぞれ何度かわりをする、鍋は空になった。満腹というには足りないが、十分に腹が膨れた。

「では、私達は先に休ませてもらいます。見張りはよろしくお願いします。まあ、このあたりでモンスターに襲われることはめつたにないから大丈夫でしょうがね」

「ちょっと待って下さい。魔法で、汚れを落とします」

「おお、水の魔法ですか。私は土属性のみ使えませんからお願いします」

ラースは、全員に昨日と同じように汚れを落とす魔法を使っていた。

「ありがとうございました。では、私はこれで」

「どうも、おやすみなさい」

そう言って、商人と村長の息子さんは馬車の中に入っていった。

「それじゃあショウヤ、朝たくさん寝たから、眠るまでの間、魔法について教えるわ」

「では、私はしばらく眠らせてもらいます。ショウヤ、この砂時計を見ていて4回砂が落ちきったら私を起こしてくれ、それまで眠るなよ」

かなり、砂の落ちる速度が遅い砂時計だ。大時間を計るため用な

のだろう。

「わかった」

セリアは馬車に入らず、近くに布を敷き、その寝転がり、布団みたいに体に布をかけて眼を閉じた。

「それじゃあ魔法について、まずは詠唱から教えるわ。詠唱は女神アーシアが作り出した力ある言葉のこと、定められた詠唱を口から唱えれば、身体に宿る魔力が反応して、形を成す、形を成した魔力に最後のキーワードとなる言葉を言えば、魔法が効果を発揮する」

なるほど、RPGのような魔法と同じと思えばいいのか。

「ああ、魔力はアーシアが創造したものならすべてが持っているエネルギーのことよ。侵略神勢力は魔力を持たない代わりに怪力や、多少の怪我じゃ死ななかったり、怪我の直りがすごく早かったりするのよ」

「魔力の大きさは人によってまちまちなのか？」

「ええ、そう、たいていの場合、属性の適正が多いほど潜在魔力も多いけどね。とはいってもある程度は努力、魔力を毎日使用したりで増やすことができるわ。それに属性の適正がなくても、適正外の魔法を使えるようになる可能性もある。一つなら適正外の属性を使えるようにはなるけど、二つ以降は死ぬほど努力しても無理よ。魔法学院で昔に二つの適正外の属性を使えるようにした魔法使いもいたそうだけど、それもあり歳をとってからで、結局その魔法使いは無駄な努力をし続けたとされているわ。属性を増やすより、適正のある属性を極めるほうが大事なの」

成長率が低いパラメータばかり上げて、キャラメイクに失敗する
ようなものか。

「じゃあ、実際に詠唱してみて、私の詠唱に続いて詠唱してみて」

「わかった」

いきなりだが、習うより慣れろ、だな。

「いくわよ」

ラースは不思議な言葉の羅列を、先ほど魔法を使用していたときより、はつきりと、そして聞き取りやすいようにやや遅く口にした。

詠唱が進んでいくほど、身体の中にある何かが形を成していくのがわかる。これが魔力なのか？

「クリアランス！」

「クリアランス！」

ラースに続きそういった瞬間に、身体から微々たる物だが何かがなくなる気がした瞬間に、ラースが青く光った。

「うん、どうやら成功したみたいね。ショウヤは昔かなり魔法を使っていたと思うわ。だって、魔力の流れみたいなのがスムーズだったしね」

いや、初めてだが……異世界人だから魔力の行使がしやすいのか

もしれないな。

「かもね。ま、今使用するのがうまくいくならそれでいいさ」

「じゃあ、簡単だけど生活で役に立つ魔法を教えておくわ。シヨウヤの魔力総量なら、寝るまでに練習してても魔力切れを起こすことはないからね」

と詠唱の言葉と、魔法を教えてもらった。

書くものがなかったので、ラースに見つからないように地面に日本語でメモっておいた。

「ふう、私はもう寝るね。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

と、ラースも眠ってしまった。

さて、まだ砂時計は2回しか落ち切っていない。まだまだ時間はあるから魔法の練習だ。

先ほどのクリアランスに加え、純度100%の水を出すウォーター、小さい火を出すファイアを教えてもらった。ファイアは火を使うから、ここでは練習しないほうがいいか。まずはクリアランスとウォーターの練習だな。ウォーターの使用に慣れたらファイアは練習するか、まあ、明日以降だな。

「セリア、交代の時間だ。起きてくれ」

砂時計に注意しながら魔法の練習をしていた俺は、4回砂が落ちきったのでセリアを起こそうとした。肩を揺さぶったら、

「ああ、わかった」

と、すぐにセリアは起きた。さすがにこういうのに慣れているだけのことはある。

「では、シヨウヤ、明日も早いから、寝過ぎすなよ。まあ、寝過ぎようなら私がたたき起こしてやるがな」

「それは、遠慮したいから、すぐに寝るよ。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

俺は、レースから少し離れた場所で、布を敷き、そこに寝転がって、布をかけて眠りについた。

この布もクリアランスを使えば、土とかの汚れが落ちてしまうん

だろうな。魔法って便利だな。実際に使ってみたら難なく使えたが、元の

世界でも使えるのだろうか？ 起きたら試して、みよ、う…… Z Z Z
…… Z Z Z……。

9 一転校生と先輩と

『ピピピ！ピピピ！』

朝か。

俺は目覚まし時計を止めて、眼を覚ました。

いつもの俺の部屋、元の世界に戻ってきた、か。

推測どおり俺は眠ると異世界アーシアへと移動してしまうようだ。とりあえず、眠れば戻ってこれることはわかったんだ、まずはこの生活に慣れるようにしないとな。

おっと、魔法を試してみるか、まあきつと使えないと思うが。

俺は詠唱をぶつぶつ唱え、

「クリアランス」

と言ったが、何も起きなかった。昨日アーシアで練習したとおりにしたが、魔力する感じなかった。

これはこの世界がアーシアによって創造されたわけじゃないからなんだろう。この世界に魔力なんてものはない、と言うことだ。

ちよっと、残念な気がするが、魔法が使えることがばれたら洒落にならないしな。使えなくてよかった、かな？

っと、それより、弁当を作らないと。

やはり昼食はブルジョワ弁当に限るな。

俺は弁当を作るため、まずは顔を洗いに行った。

「よっす。翔也」

「おはよう、明」

いつものごとく、明が挨拶をしてきたので、俺も挨拶を返した。
と、その時、

「おはよう、中野君」

と女性の声で挨拶をかけられた。

この声は、あの人か……俺は声^{あずまみもり}がしたほうを振り返った。

そこには、俺の予想通りの人、東美守、東先輩がいた。

「おはようございます、東先輩」

「うむ、というわけで中野君、今日は剣道部に出てもらおう。昨日、
一昨日とサボったのだから、今日は是が非でも出てもらおうぞ」

ああ、そういえば週末は当剣道部には顔を出さなかったし、今週

には入ってから一日も剣道部に出てないな、だから教室まで来たのか……これは断れないな。断ったら、東先輩の信奉者達に何をされるのかわかったもんじゃない。

「わかりました。約束しますよ」

「そうか、わかった、放課後武道場で待っているぞ」

東先輩はとたんにご機嫌になって、教室を出て行った。

嵐みたいな人だ。他の生徒達からすれば完璧超人で、頼れる副会長なのだが、俺はあの騒動に巻き込まれてから、少し先輩が苦手だ。確かにいい人だし、美人で、話をしやすい人ではあるのだが、いかんせん信奉者達の行動が行き過ぎている面がある。一時期は本当にウザかったからな……やめよう、この話題は思い出すことすら無益だ。

それよりも、アーシアでのことだ。魔法はあれら以外にもあるから、それを教えてもらうか、それなら冒険者としてやっていけるだろうし、なんなら別の冒険者に全属性の魔法が仕える初心者冒険者としてパーティーを組んでもらうようにするか？これはギルドの仕組みをもっと知ってからだな。それにあのゴブリンが持っていた刃の厚い剣、あれは結構業物だから売ったらそれなりの額になりそうだ。ラーズ達にもついてきてもらえば、値段もたたかれることはないだろうし、

「はい、皆おはよう、出席をとるわよー」

つと、ヨーコ先生が来たな。アーシアのことはまた時間が空いたら考えるか。

「なあ、翔也、なんでかなあ？」

「俺に聞くな」

「じゃあ、誰に聞けばいいのさ」

「知らん」

俺はいつものように学食で明と昼食をとる、はずだった。

しかし、なぜか昨日の二人、外村さんと喜多川も一緒に食事をしていて。喜多川は洋食セットを、外村さんは昨日と同じきつねうどんを食べていた。

なぜ、この二人も一緒に食べているのだろうか？

しかも喜多川は特Aクラスの美人で、早くも学園で話題になっているほどだ。そんな喜多川と一緒に昼食を食べている俺達はすごく注目を集めていた。いつもより学食で食べている生徒達が多いのは、

間違はなく喜多川のせいだろう。

俺はため息をつきながら隣の席で、黙々と食事をしている喜多川をちらりと見た。

「何？」

喜多川と眼が合い、俺に聞いてくるが、俺のほう聞き返したい。

「なんで、俺達と一緒に昼食をとっているのかな？と疑問に思ったんだが」

「食堂に入ったら、偶然あなた達が眼に入っただけからよ。知らない人と一緒に食事をするより、知り合いと一緒に食事をするほうが自然でしょ」

普通は仲がいい人同士で食事を取るものだと思う。そう反論したいがしても無駄だろうな、喜多川はわがままというか、他人の意見で自分の考えを変えようとはしない、昨日、今日と少しだけ話した程度だが俺の思いは間違っではないだろう。

我慢して、この状況で食事を続けるしかない、か。

早く食事が終われば、この状況から抜け出せると思い、黙って食事を続けようとしたが、

「中野君、朝、先輩と話していたのを聞いたのだけど、剣道部に所属しているのかしら？」

と、喜多川に話しかけられた。

いったい、この女は何を考えているのだろうか？さっぱりわからない。

黙っているのも何だから、とりあえず答えておこう。

「一応。週に2、3回顔を出す程度だけど」

「そう……今日は練習に出るのよね？朝、あの武家の出身みたいな先輩に言っていたし」

武家の出身で、確かにそんな感じがするが、以外に喜多川は面白い感性を持っているのかもしれない。普通は美人とかが、ってそうか、喜多川はタイプが違うが東先輩並みかそれ以上の美人だから、そんな感想は持たないのかもしれない。

「ああ、教室まで来られたら、拒否すると周囲から何をされるかわからないし」

「中野君、親衛隊から目をつけられてるもんね」

外村さんが話に加わった。

俺が外村さんに抱いている印象は、いかにもオタクな女子といった感じだ。結構可愛い部類に入るが、ちょっと度が厚い眼がねを掛けており、よく漫画やゲームの話と同じ趣味を持つ女子、男子と一緒にしている。

俺だって漫画や小説、ライトノベルを読むし、ゲームもするが、あそこまで濃い話題にはできない。しかも女子のみで話しているときはBLについて話をしているときもある。

そんなわけで、俺とは全く接点がない、というか持ちたくないの、外村さんはクラスは一緒だが話したことすらない。

ちなみに、明が言うには外村さんは可愛いのにオタクと一部の男子からは嘆きの声が、逆にオタクなのに可愛いと一部からは絶賛の声が上げられているようだ。こいつはそんなことをどうやって調べているのだろうか？本当に謎の多い奴だ。

「親衛隊？」

「そっか、女神さんは知らないよね。今日、中野君を部活に出るよ
う言っていたのは、東美守先輩。身長172センチの長身でかつこ
いと感じの美人。剣道部のエースで全国区、勉学も模試で県100
番以内をキープしていて、この学校の副会長。そんな東先輩は男子、
女子問わず人気者で、東先輩を崇める一部の人間を親衛隊と呼ぶの。
東先輩と仲がいい人は嫉妬からいろいろされるけど、普段は生徒会
の活動とかに積極的に参加したり、勉強会を開いたりしているして
いるの。中野君は前に剣道で東先輩と試合して1本取っちゃたこと
があつて、それ以来東先輩は中野君と練習するのを楽しみにしてい
るんだよ。そのせいで中野君は親衛隊に眼をつけられているってワ
ケ」

親衛隊、奴らのことは思い出したくない。

「そんな人達が本当に存在していたのね……」

「まあねえ、この学校は三学年合わせて生徒数が約1500人もい
るから、中にはそんな人たちもいるってワケだよ」

「そんなにいるんだ。通りで大きい校舎だと思ったわ」

この学校のある市はしなないに高校がこの学校以外に二つしか存在
していない。一つは低学歴の人間、いわゆる不良とかそんな感じの
奴らがいっぱいいる高校と、私立の誰でも入れるが学費が高い高校
しかない。普通はありえないが、いろいろな政策とかの結果こんな
ことになってしまったんだそうだ。さらに、俺のように隣の市から
この学校に入ってくる奴もいるので、生徒数が約1500人という

異常な事態になってしまっている。

もっともそのおかげで、ものすごい数のOB達の寄付や市内の店の協力で学食ができたり、購買部ができていたりしている。だから生徒達からは特に不満はないというか、人付き合いの悪い俺でも毎日学校に行けるくらいには感じのいい学校だ。

先生達も大人数で、ヨーコ先生のような若くて美人な女教師がいるし、いかにも厳しい感じの年嵩の学年主任とかもいる。

そんな感じの学校だ。我らが県立大樹院たいじゅいん学校は。

「ははは、この学校は本当に特殊だからね。生徒数が多いから、高校のすぐ近くにある商店街は今でも繁盛してるし、そのおかげで文化祭とかはすごく盛り上がるんだよ。私は地元から通ってるから、去年友達と行ってみたけどすごく楽しかったよ」

「そっか、それは楽しみね」

と喜多川はふっと笑った。

それを見た外村さんは赤くなってもじもじしだした。

それもわかるかもしれない、喜多川の笑顔は反則的だ。前に一度遠目で見たことはあるが、確かに綺麗だった。しかし、今近くで見たらそんな感想どころではない。なんというか、女神って感じた。

ああ、だから外村さんが女神さんといっているのか。

しかし、文化祭が楽しみといったり、親衛隊に呆れたり、女神のように綺麗かもしれないが、喜多川の内面は普通の女子高生と変わらないのかもしれない。ただ、超絶的に美人なだけで。

あの後、食事が終わっても予鈴が鳴るまで喜多川と外村さんと一緒に話していた。

昼食は周りの人間が注目していて食べにくかったが、それでもいつもより楽しかった気がする。

たまにはあんな昼食もいいかもしれない。
？

でも、何か忘れているような気がする……あ、そうか、明が一言も話していなかったんだ。

あいつにしては珍しい、放課後、は部活だから、明日登校してきたら聞いてみるか。

10 先輩と転校生と

放課後、ホームルームが終わり、俺は剣道部の部室がある武道場へと歩いていった。

季節は夏の終わり、今は9月の下旬だ。

実家がある市は暑いが、この学校は山の近くにあり、時折風が吹いてくるので、以外に涼しい。

学食のある食堂と保健室は冷暖房完備で、各教室には扇風機と暖房が常備してある。そのため、夏でも暑すぎて授業にならないという事態になったことはない。

そんなことを思いながら部室の扉を開けると、部長と副部長がいた。

「おや、中野君かい、久しぶりだね」

穏やかな声で話すのが部長、坂本哲也さかもとてつやさんだ。

「あの女が教室まで、催促しに行ったらしいな。お前も災難なことだ」

このちよつと気難しい感じの人が副部長の酒井田健吾さかいだけんごさん。

この二人は中学校が一緒に、ずっと剣道部に所属してきただけあって仲がいい。

気難しいが実力があり、部員を厳しく指導するのが副部長、そのケアをする話しやすく相談しやすい部長。少し前に三年生が引退するときどちらが部長、副部長をするかもめたらしいが、どちらも互いに相手のほうが部長にふさわしいといていたらしい。それほど互いを認め合っている仲だ。剣道の実力も東先輩には及ばないも

の、俺が試合をしたとして3本に1本は取られるくらいの実力がある。県内では上位クラスだ。

俺が練習にあまり来ないうえ、試合にも出ないことを責めたりせず、一部の實力のある人たちと練習させたりと、うまく俺を利用している形で練習に参加させてくれる。

そんな高校生にしてはすぐ大人な人達なので、俺は敬意を持って接している。人付き合いの悪い俺の数少ない知り合いだ。

「もう、慣れましたよ。慣れたくはありませんでしたけど」

「一度あの女には、下級生に迷惑をかけるなど言っておかないといけないな」

副部長は東先輩と仲が悪い、これは東先輩が副部長をライバルとみなしているからだ。副部長は気難しい人だが、顔が結構なイケメン（悪役顔）なため、一部の女生徒達から人気がある。さらに剣道では東先輩に負けるが、勉強では常に学年1位だ。自分が勝てない奴が身近にいる、そのため東先輩にライバルとみなされ、一部の親衛隊（男子）にいろいろと問題を起こされた。そのため、東先輩を嫌っているのである。

ちなみに副部長が俺に優しいのは、俺が副部長と同じように親衛隊に絡まれているから、つまり親近感が沸くからだ。実際に二人同時に親衛隊に絡まれたこともあり、俺は副部長を身内のように感じてしまったことがあった。

「とはいっても、問題を起こすのはあの親衛隊だからねえ、彼女に言っても一時的にしか効果がないと思うよ」

親衛隊は、普段が品行方正だけあって、俺達に絡んでくるときも周囲の目がないときだけだ。そのせいで東先輩に強く言えないとい

うのものもある。無論限度があり、一度ははっきりと東先輩に注意したのだが、奴らはより周到になって絡んでくるようになった。

本当に困った奴らだ。もし、東先輩に好きな人とか、恋人ができれば暗殺とかしかねないほどだ。いずれ彼らとは決着をつけなければならぬのかもしれないな。

「いずれははっきりさせないといけないが、今日はやめておこう。それより練習だ。俺達が遅れたのでは、示しがつかん」

「そうだね。行こうか、中野君も」

「はい」

俺は部長たちの後ろについていった。

武道場では30人近い生徒達が集合していた。

剣道部は東先輩、女子の副部長、部長、副部長と実力者であり、美形が揃っており、彼ら目当てで所属しているもの、もともと中学で所属していた者、それらをあわせると、かなりの大人数が剣道部に所属している。三学年合わせた場合100人近く（幽霊部員含む）はいるのではないだろうか？

俺のように週に2、3回練習に来るだけの生徒もいるので、いつも一学年から15人近くの生徒が練習に参加している。今は三年生が引退してしまったので、30ほどの人数に落ち着いている。

俺は集合している生徒達の後ろのほうに並んだ。

「よし、じゃあ、時間になったことだし早速練習を始めようか。まずは準備体操、ストレッチから」

いつも部長の指示で練習が開始される。

顧問？顧問は監督として隅で本を読んでいたりと、提出された課題のチェックをしていたりしている。何年か前は剣道の段位を持っている教師がいたが、別の学校に変わってしまい、それ以後剣道部は部長達が練習方法を決め、その指示をするようになったらしい。たまに商店街で段位を持っていて今も剣道をやっている人が教えに来てくれるし、卒業して大学でも剣道を続けている人たちも来てくれる。とはいえ、指導より試合形式の稽古が中心になる。それでも部員に個別に教えられるぐらいには余裕があるから助かっているんだろう。試合形式での練習があるから十分に体をほぐしておこう。

基本練習が終わったら、東先輩と試合稽古ばかりすることになる。怪我をしないように気をつけないといけない。東先輩は男子に比べると力こそ劣っているが、技の冴えがすごい。もしかしたらまともに有効打をくろうと骨にひびがはいるくらいはするかもしれない。

10分ほど時間をかけて、体をほぐし、そして素手で竹刀を軽く振る。

調子は……いいな。

いつになく、体が動く。いい感じだ。これなら東先輩に勝ってしまいかもしれない。そう思えるほど体の調子がいい。

「では、各自、防具装着面着けをして、グループごとに別れて打込み、切り替えしの練習を行うこと」

俺のいつも練習するグループは部長、副部長、東先輩のいる団体戦メンバーの男子女子混合のグループだ。

剣道部に入って、最初は1年と一緒に練習していたが、東先輩との一件からこのグループに入ることになってしまった。いろいろと複雑な気持ちだが、実力者と練習ができるので、あまり気にしてない。

それぞれが組になった相手に技を打ち込み、太刀筋を調整しつつ、反復し身体にしみこませていく。

「コテ！メーン！ドウ！メーン！」

「メン！ドウ！メン！メン！ドウ！」

最初は単発技を、次に連続技を打ち込み、打ち込みの練習は終わる。

この剣道部では、単発技は正面↓小手↓胴↓小手面↓小手胴↓正面というパターン、連続技は面面面↓小手面面↓小手面小手面↓小手面胴面というパターンで打ち込みをしている。練習方法は男女の部長、副部長で相談して決めたらしい。

打ち込みの後、少し休憩を取って、切返しの練習だ。

前進しつつ打ち込み、後退しつつ打ち込み、最後に打ち込みを竹刀で受ける。面、胴、両方行う。

今は九月の終わり、季節は夏が終わったばかりで、まだまだ暑さ

が残っている。

すぐに汗でびっしょりになってしまう。

防具は丁寧に整備しておかないとすぐに臭うようになる。学校の備品の防具なんて、古いものはもう異臭がする。しかし練習のときにはそんな雑念はいらない、ただ相手に向かい、一心に竹刀を振るう。

「よし、切返しが終わったグループから、試合稽古を行う。11月の新人戦に向けて、10月の文化祭が終わったら、すぐに団体戦メンバー選出の試合を行う。各自真剣に練習を行うこと！」

新人戦、か。

この学校の剣道部は一年生はどれほど実力があろうと、新人戦からしか試合に出ることができない。

しかし、新人戦からは俺達一年生も試合に出られるようになった。中学生の時は問題が起きて部活に行かなくなって試合に出ることはなかったが、この高校に入ってから東先輩の親衛隊との確執があるが、学校に行きたくない、人とかかわりたくないほどの問題は起きていないので、試合に出られる。

積極的に部に関わることは気持ちがついていかないが、やっぱり試合には出てみたい。同学年と戦って勝つ。自分の積み重ねてきた結果を得たい。

真面目に練習に出るようになろうかな？とはいえ道場での練習のほうが厳しいがより上達できるし、土日日の練習には一回は顔を出すくらいでいいか。

「さあ中野君。早速やろうじゃないか。しばらく君が来てくれなかったので、身体が疼くんだ。今日は徹底的に付き合ってもらおうぞ」

東先輩がうきうきしながら俺に話しかけてきた。

発言がちよつと勘違いされそうだが、実際はへとへとになるまで試合形式の練習するだけだ。

「今日は身体の調子が何時になくいいので、付き合いますよ」

「ほう、それは楽しみだ。では…」

と東先輩は早速試合をはじめようとするが、

『ざわ……ざわ……』

と武道場の入り口が騒がしくなった。

「いったい何だ。まったく、すまないが少し待っていてくれ」

「僕も一緒に行こう」

と男子女子両方の部長が騒ぎをおさめにいった。

「で、さっき調子は万全っていったけど、実際どうなの？中野君」

話しかけてきたのは、女子剣道部副部長の君沢麗さんきみさわうらら。

この人は特別美形とか実家が大金持ちとかいうわけではなく、剣道の腕以外何もかも普通の女子高生だ。気さくで庶民的で俺でも話しやすく、東先輩との絡みからそれなりに話をする程度には知り合いいといえる人だ。俺が女子剣道部員で一番話をしている人かもしれない。

「そうですね。今日の状態なら五分五分かもしれせん」

「それはそれは、楽しみになってきたよ、あれ？聖達が戻ってきたけど、あれは誰かな？すっごく綺麗な娘だけど」

君沢さんの声で、俺は入り口を見た。

そこには部長と東先輩と一緒に喜多川と外村さんがいた。

なんで二人が武道場にいるんだろうか？

「中野君、お客さんだよ」

部長も何事もなかったかのように話さないで下さい。

「えーと、なんで二人がここに？」

「…時間が空いて暇だったからよ。あなたがあの強い人と試合するって話を思い出したから、ちょっと観戦に来ただけよ」

「あはは、女神さんの強い希望だったんで、私も部活を休んで案内をね」

……喜多川が何を考えてているのかは考えても無駄だからもういい。

東先輩との試合はたまに観戦していく奴らもいるし、中にはジュース1本賭けたりしている奴もいる。観戦なら別に勝手にすればいいと思うが、何でここでするんだろうか？

「彼女が観戦している人たちと一緒にいると、うるさくなるから、彼女達はここで観戦してもらおうと思ってね」

「観戦している人達は他にもいるからな。問題を起こしたわけでもない彼女達だけ観戦を禁止するわけにもいかなないので、こういう措

置を取った」

喜多川は女神とさえ言われるほどの美しさを持っている転校生、そんな見慣れない美少女が観戦に来たから騒ぎになったのか。

「部長達が判断したのなら、それに従いますよ」

「うむ、では、試合を始めようか」

「審判は僕達がしよう」

部長と副部長、君沢さんの三人が審判だ。彼らなら公平に判断するし、きわどい判定の見切りも大丈夫だろう。顧問？遠くで監督としてはいるけどいつもどおり、課題のチェックなどをしている。あの先生はもしものときの責任者でしかないからな。

手ぬぐいをきつく縛り、面をかぶる。

面を礼をして、中央まで移動し、蹲踞をして、互いに竹刀を向けあい、先をあわせる。

そして、

「はじめ！」

部長の合図とともに、試合が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5923t/>

大樹と夢物語

2011年7月23日06時12分発行